③　『菊と刀』に描かれた日本・日本人

これまでに発表された「日本論」・「日本人論」に関する外国人の著者による書物は多い。その中で，特筆すべき名著が「菊と刀」である。

※原題名は「The Chrysanthemum and the sword **ー** Patterns of Japanese Culture**」**

1)　この本が書かれた事情

- **出版されたのは1946年（第２次世界大戦の終了の翌年）。**
- **著者は〔1ルース・ベネディクト　〕。1887年生－1948年没。当時のアメリカの代表的文化人類学者（いろいろなタイプの文化を比較する学問）。**
- **この本が企画されたのは，1944年（第二次世界大戦の末期）。当時，太平洋戦争は最終局面を迎えており，アメリカ政府としては，やがて来る日本の敗北・占領という事態に備え，自分たちとは異なる思考様式・行動様式を持つ日本人について，敗北の最後の抵抗の程度や占領政策の具体的方法を考えるために，日本人や日本の文化に関する体系的な研究が必要であった。**
- **出版は大戦終了後。日本でも1947年に初めて出版され，それ以来長く読み続けられてミリオンセラーとなっている。**

★太平洋戦争中にアメリカ軍を悩ませ不思議がらせた日本人の行動様式は何か。

・勝算がないとわかっていながら犬死にのような戦いを挑んで命を落とす。

・捕虜になるよりは自決する。

※これはアメリカ人にとってはカルチャーショックであり，日本人は自分たちとは違う異質文化を持った人間であるという認識が広まっていた。

★これは日本人がどのような考え方を持っているためか。

戦死することは名誉であるが，死をおそれたり捕虜となることは不名誉な恥ずべきことである。これは武士動的発想が基盤となり，戦前の教育で培われた。

2)　ベネディクトの主張

ベネディクトは日本人の行動とアメリカ人の行動の違いを次のように説明している。

※引用は長谷川松治訳『菊と刀ー日本文化の型』（社会思想社1972年版）より

（前略）このように，慎重と自重とを全く同一視するということの中には，他人の行動の中に看取されるあらゆる暗示に油断なく心を配ること，および他人が自分の行動を批判するということを強く意識することが含まれている。彼らは，「世間がうるさいから自重せねばならない」とか，「もし世間といものがなければ，自重しなくともよいのだが」などと言う。こういう表現は自重が外面的強制力にもとづくことを述べた，極端な言い方である。正しい行動の内面的強制力を全然考慮の中に置いていない表現である。多くの国ぐにの通俗的な言いならわしと同じように，これらの言い方も事実を誇大に表現しているのであって，現に日本人は時によっては，自分の罪業の深さに対して，ピューリタンにくらべても決してひけをとらないくらいに強烈な反応を示すことがある。とはいうもののやはり上の極端な表現は，日本人がおよそどういうところに重点を置いているかということを正しく指摘している。すなわち，日本人は罪の重大さよりも恥の重大さに重きを置いているのである。

さまざまな文化の人類学的研究において重要なことは，恥を基調とする文化と，罪を基調とする文化とを区別することである。道徳の絶対的標準を説き，良心の啓発を頼みにする社会は，罪の文化 'guilt culture' と定義することができる。しかしながらそのような社会の人間も，例えばアメリカの場合のように，罪悪感のほかに，それ自体は決して罪でない何かへまなことをしでかした時に，恥辱感にさいなまれることがありうる。例えば，場合にふさわしい服装をしなかっことや，何か言い損ないをしたことで，非常に煩悶することがある。恥が主要な強制力となっている文化においても，人びとは，われわれならば当然だれでも罪を犯したと感じるだろうと思うような行為を行った

場合には煩悶する。この煩悶は時には非常に強烈なことがある。しかもそれは，罪のように，懺悔や贖罪によって軽減することができない。罪を犯した人間は，その罪を包まず告白することによって，重荷をおろすことができる。この告白という手段は，われわれの世俗的療法において，また，その他の点に関してほとんど共通点をもたない。多くの宗教団体によって利用されている。われわれはそれが気持を軽くしてくれることを知っている。
恥が主要な強制力となっているところにおいては，たとえ相手が懺悔聴聞僧であっても，あやまちを告白しても一向気が楽にはならない。それどころか逆に，悪い行いが「世人の前に露顕」しない限り，思いわずらう必要はないのであって，告白はかえって自ら苦労を求めることになると考えられている。したがって，恥の文化 'shame culture' には，人間に対してはもとより，神に対してさえも告白するという習慣はない。幸運を祈願する儀式はあるが，贖罪の儀式はない。

真の罪の文化が内面的な罪の自覚にもとづいて善行を行うのに対して，真の恥の文化は外面的強制力にもとずいて善行を行う。恥は他人の批評に対する反応である。人は人前で嘲笑され，拒否されるか，あるいは嘲笑されたと思いこむことによって恥を感じる。いずれの場合においても，恥は強力な強制力となる。ただしかし，恥を感じるためには，実際その場に他人がいあわせるか，あるいは少なくとも，いあわせると思いこむことが必要である。ところが名誉ということが，自ら心中に描いた理想的な自我にふさわしいように行動することを意味する国においては，人は自分の非行を誰一人知るものがいなくても罪の意識に悩む。そして彼の罪悪感は罪を告白することによって軽減される。

アメリカに移住した初期のピューリタンたちは，一切の道徳を罪悪感の基礎の上に置こうと努力した。そして現代のアメリカ人の良心がいかに罪の意識に悩んでいるかということは，すべての精神病医の承知しているところである。しかしながらアメリカでは，恥が次第に重みを加えてきつつあり，罪は前ほどにははなはだしく感じられないようになってきている。アメリカではこのことは道徳の弛緩と解されている。この解釈には多分の真理が含まれているが，しかしそれはわれわれが，恥には道徳の基礎というような重圧を果たす資格がないと考えているからである。われわれは恥辱にともなう烈しい個人的痛恨の情を，われわれの道徳の基本体系の原動力とはしていない。

日本人は恥辱感を原動力にしている。明らかに定められた善行の道標に従いえないこと，いろいろの義務の間の均衡をたもち，または起こりうべき偶然を予見することができないこと，それが恥辱（”ハジ”）である。恥は徳の根本である，と彼らは言う。恥を感じやすい人間こそ，善行のあらゆる掟を実行する人である。「恥を知る人」という言葉は，ある時は 'virtuous man' [有徳の人]，ある時は' man of honour' [名誉を重んじる人]と訳される。恥は日本の倫理において，「良心の潔白」，「神に義とせられること」，罪を避けることが，西欧の倫理において占めているのと同じ権威ある地位を占めている。

★ベネディクトの分析

	日　　本	アメリカ・ヨーロッパ
特　色	〔2　恥　〕の文化	〔3　罪　〕の文化
発　想	他人の〔4　批評　〕を気にする	絶対的に標準となる〔5　道徳　〕が存在
善　行	〔6 外面 〕的〔7強制力〕に基づく	〔8 内面 〕的な罪の自覚に基づく
他人の目	恥を意識するには他者の目が必要	他者がいなくても罪の意識に悩む

★問題点

日本文化の特色を鋭く指摘しているが，勝者が敗者を分析したものであるため，自分の文化を優越的に考えている。（〔9　文化相対　　〕主義の発想が欠如。）

★恥の文化に関するその他の考察

ベネディクトは子供のしつけについて，日本人の特色を次のように指摘している。

7歳以降しだいに，用心深くふるまい，「恥を知る」責任が課せられるようになり，しかもそれは，もしその責任を果たさなければ自分の家族のものから排斥されるという，最も強力な強制力によって支持される。‥‥こういう幼時の経験が，「世間の人々」に笑われ，見捨てられるぞと言い聞かされるときに，子供に自分に課せられたはなはだしい拘束を甘んじて受け入れる素地を作る。‥‥子供はしだいに多く個人的な満足を放棄することを要求されるが，約束される報いは「世間の人々」に承認され，受け入れられるようになるということであり，罰は「世間の人々」の笑いものになるということである。これはむろん，子供のしつけに当たって，たいていの文化が頼りとする強制力であるが，日本においてはそれが他に類例がないくらい重きを置かれている。「世間の人々」に見捨てられるということがどんなことかということは，すでに両親の，子供を捨ててしまうといって脅かすあのからかいによって，子供の脳裏にまざまざと焼き付けられている。彼の一生を通じて，仲間はずれにされることは，暴力よりもなお恐ろしいことである。（332－333ページ）

★これはどういう意味か。

日本人は子供のしつけに関して，「よそのおじさんが怒るからそれをやめなさい」とか「そんなことする子はうちの子ではない」というようなしかり方をする。

★またわれわれの社会の他のどのような特色を説明しているか。

集団の中で他人と同じことをしていることがよいことであり安心であり，反対に個性的な人間や他の人と少し異なっている人間は集団から排除する。

またこれに関しては次のような考察も考えられている。

※**東洋大学教授三上俊治**　http://www.soc.toyo.ac.jp/faculty/mikami/virtuallab/

「赤信号，みんなで怖くない」という心理も，やはり「一人だと恥ずかしい」という感情にもとづくものだろう。入学式で一人だけ普段着で出席するのは，やはり「恥ずかしい」。それは「劣等」とはやはり違う性格の羞恥発生要因だと思われるのである。日本人がとかく「横並び」になるのも，一つには，こうした「少数派」になることに伴う「恥ずかしさ」の意識があるためだと解釈することができる。外国で「背が低い」とか「肌の色が違う」ことを「恥ずかしい」とすれば，それは劣等というより「少数派」だから恥ずかしいと感じるのではないか。

3)　ベネディクトの主張　その２

ベネディクトは，日本の文化を恥の文化と定義する他に，次のようにも考察している。

★日本人が日常生活で大切しているもの

日本人は他人に世話してもらうとこれを恩ととらえ，それに報いること＝義理を大事にしてきた。しかしそれは時に人情と矛盾する場合もあった。

日本人は偶然に人から恩を受け，したがって返礼の負い目を背負い込むことを好まない。彼らは常に，「人に恩を着せる」ということを口にする。‥‥比較的縁の遠い人から，はからずも恩恵を蒙ることは，日本人の最も不快に感じるところである。近隣の人たちとのつき合いや，古くから定まった階層的関係においてならば，日本人は恩を受けることの煩雑さを承知しているし，また喜んでその煩雑さを引き受けてきた。ところが相手が単なる知人や，自分とほとんど対等の人間の場合には，心安からず思う。彼らはなるだけ，恩のさまざまな結果に巻き込まれることを避けたいのである。‥‥たとえ煙草一本もらっても，日本人は心苦しく思う。